

空



2004年

SORA 8号

晴夜 (8) | 3

柴田 佐知子

サイレンを止めて縮みし消防車

悲恋には遠きままなる柚子湯かな

海鳴りを聞く忘年の座を抜けて

正直に日暮来てゐる白障子

悪人も死の手は組まれ冬霞

神さまがあちこちにゐて冬ぬくし

雨粒に色の濃くなる焚火跡

白菜を抱へて母は冷ゆるなり

山なみの走り落ちたる冬の海

概杷の花

青山 悠

橋三つ見えて秋澄む多々良川

ハンゲライダーの女降り立つ刈田かな

埋立に揺るる一湾珊瑚草

枯れ色に豆稻架の鳴る干拓地

色鳥の覗いてゐたる戦絵馬

竜淵にとり残されし夜泣神



芙蓉の実診療手帖に余白なし

虚栗叩いてゆきし遍路杖

穴まどひ切腹岩の前にな

踏まれたる邪鬼が振り向く秋の暮

蛇穴に即身仏を志し

つつましき色に日あたる枇杷の花

甘鯛の頭大きく料られし

産土神は子安神なり冬桜

被災地に送る毛布を山積み

生家の庭に大きな夏蜜柑の木があり冬もたわわに実を付けていた。ある夜その木で梟が鳴きだした。星もみえないような暗い夜である。祖母に「とろすこが鳴いとる。こげな晩は盗人が入るかもしれん。誰か死ぬとかもしれん。しつかり戸締りして早う寝らんと。」と言われた。私のふるさとでは「とろすこ」と呼ばれる梟は凶鳥とされていたようだ。

梟の低く陰気な声は「とろすことおこい」と聞こえていた。闇がたつぷりとあつた頃である。村の男の子達は「とろすことうこい、鼻くそ食わしよ」などと囃しながら遊び回っていた。子供の遊び言葉は思いもよらない言葉をつないでいくものである。「大寒小寒、藤ちゃん方に行ったら諸煮で隠した。おれもいつちよう欲しかった」と呼ばわりながら学校から帰っていた。どれもあまり品はよくない。男の子たちに人気があつたのはこの手の囃し言葉であつた。

先日、真昼の九州大学で梟に出会った。丸い大きな眼をひらいて工学部の建物の横にじつと立っていた。学生たちは気にもとめず「とろすこ」の横を歩きすぎていた。

毛
布

秋 千 晴

母の座も妻の座もあり大花野

颱風の目の中にて香を焚く

貰ひたる柘榴をしばし飾り置く

まだ青き籠に盛りたる青蜜柑

段取りの整ひて蟻穴に入る

志賀島海に月ある観覧車



つつましく暮してをりし新生姜

髪飾り絶えず揺れをり七五三

箱入りの蜜柑四角に整列す

箒目の深く凍てたり光明寺

雪積もる隣の屋根の近づきし

活ける度こぼれてゐたる実南天

積雪のどすんと話途切れけり

毛布被し心のすこし獣なる

箒目の流れ止めたる落椿

次女が幼稚園に行き出した頃から二十
年間、数学の添削指導をしてきた。最初
は一枚の添削に随分と時間がかかり、割
の合わない仕事だと思っていたが、だん
だん慣れていくと生徒達のミスポイント
が目に見えび込むようになり時間も随分と
短縮され、ミスポイントの予想すら立つ
ようになった。

同じ時期に茶道も八年ぶりに再開し
た。初めの頃は先輩のお点前に吸い込ま
れるように見入っていたし、憧れてもい
た。ところが今は、人の間違いが目につ
き始め、感動する程見入る事がなくなっ
てきた。しかしいざ自分のお点前とい
う時には、同じような間違いをしている。
年を重ねると間違いや欠点に目が向く
ことが多くなり、新鮮味を感じなくなっ
て来ているような気がする。このまま更
に年を重ねるのではなく、あらゆるもの
の美点を見いだすように心掛けたいもの
である。

秋晴れの中、庭の花をたくさん摘んだ。
シヨパンを聞きながら、花を活けている
と、とても幸せな気分になった。今日、
十月十六日は結婚記念日である。

寒
櫛

あさなが
捷

つくしんぼ苦勞を知らず辛抱せず

信じてはをらぬ茅の輪をくぐりけり

大茅の輪より子供らの飛び出せり

男など眼中になき章矢打つ

蟹の目の泡だらけにて並べらる

あきらめといふ空蟬の姿かな



と

ややこしやややこしやと聞く蟬時雨

空蟬のものはや男を超えてをり

畦道に案山子固めて置かれをり

単線の駅舎に似合ふ花カンナ

声あげて畦に揃ひし曼珠沙華

テーブルに弾けし柘榴残されし

淋しくはないと言ひ張る唐辛子

満月を膝にころがす露大風呂

寒椿傷つけあふを恐れざる

私は、ある教育関係の教室で助手として採点の仕事をしています。英語の教材に『The Rabbit and The Turtle』（ウサギとカメの話があり、そこで一般動詞の過去形を学習するようになっていきます）。

ウサギとカメの話を知った子供のときから、私には一つの疑問がありました。それは、どうしてカメは不得意なかけっこで、ウサギと勝負しようなどと云ったのかということ。たまたま、ウサギが寝込んでしまったから勝てたけれど、と思っていました。期待をもって全文を読んでもみましたが、その答えは書かれていませんでした。

先日夕食のとき、ふと思い出して、中学生の娘にその質問をしたところ、「絶対寝るって分ってたんじゃない?」、即答でした。目からうろこ、たちまちにして疑問は氷解しました。

これでウサギは、まぬけではなく、気の毒なウサギだったのだとわかりました。それともう一つ、子供はいつの間にか親の横をすり抜けて、はるか前方を疾走中なのだ。

外
套

小林 朱夏

無花果を貴石のごとく扱へり

酒好きに古酒も新酒もなかりけり

蓮池の端より枯れてきたりけり

咳き込みりどうでもなれと思うほど

冬立つと雲の軍列続きけり

怖いものなくて五十路や冬桜



葱刻む音に変調なかりけり

母の席あけてゐるなり日向ぼこ

客去りし雪見障子を降ろしけり

外套ぬぐ心読まれているみたい

冬籠り悪しき楽しみ増えにけり

剣山をひとつ求めし年の暮

初雀遊んでゐたる方位盤

新しき下駄に淡雪降りはじめ

あたたかや一匙づつの離乳食

上弦の頃から楽しみにしていたのに、
今年はずかしい無月です。

その日もいつもの様に、夫と二人で夕食をいただきながら、私はチラッと夫の顔を見て

「私より長生きしてね」と言いました。

舅は本が大好きで、小山ほどの蔵書に囲まれて姑と二人で暮らしていました。ミシンも鏡台も読みかけの本の置き場所となります。

枕元に「親鸞」を残し、舅は九十才を過ぎて亡くなり、その後八十才過ぎの姑は「あなたの宝の山は私にはゴミの山」と大変でした。縁のあった学校に寄贈したり、古本屋にも声をかけても小山は無くなりません。

夫は父親似で無類の本好きで、おまけにレコード、カセット、CDの蒐集家。二階の床は悲鳴を上げています。

私はもう一度念を押しました。

「私より一日でも長く生きてね」…と。

大生簀

里中章子

国道のひとすぢ虫の領にいる

新人の組む青竹の稲架二つ

海黒し昇りつめたる鷹柱

窓の灯の一つともれる雨月かな

夕べまで張りし朝顔西鶴忌

邯鄲の屍をつくづくくと掌に

九重の飯田高原の薄が光の中に波打っている映像を見た。

その一方では、台風、水害、地震などの天変地異があり、その上、人の世では、簡単に人を殺すようなおどろおどろしい出来事が氾濫し、心が痛むばかりである。経済効率最優先で物の豊かさばかり追求する。自分の居心地の良さだけを考えて人との間のとり方が分らない。自分自身を愛することができないので人を信じることも出来ない。等々現代社会の病理現象は枚挙に暇がないが、それは子供を育ててきた私たち親の社会の責任でもあるだろう。

母親は、美味しい料理をおなか一杯食べさせて、「どんな時にも、私だけはないあなたを信じているから」とだけ言えば良



秋晴れの能古をはるかや大生簀

稲妻の照らす極彩えんそく偃息図

張替へし蜘蛛の巣露のあらたなり

磯へ飛ぶ波の秀先や男郎花

学校の木犀がまづ香りけり

うかうかと崖に立ちたる紅葉狩

蟪蛄のおとどか風の中なるは

真つ新たな朝日や凜と一位の実

月明の水槽烏賊の眼に見らる

いと思ひ、口にもしていた。しかし実際には「さあもつと感性を磨きなさい。本を読みなさい。時間を有効に使いなさい」などと自分も出来ないようなことをいい続けた。子供は親の言うようには育たない。する様に育つのである。恥ずかしい限りだ。

この情報化社会では、インターネットなどを使って知識は簡単に得られる。しかし「知恵」はそうはいかない。時間がかかる。が、知恵を伝えて社会を成熟させるのが私たちの務めではないだろうか。

「空」の記事の中で高倉恵美子さんの書かれる「耳納便り」は少し前までの日本人の丁寧な暮らしが描かれていて読むたびにほっとする。長く生きてきた人の人生の厚みが語らせるこういう言葉こそ伝えるべき知恵ではないだろうか。

これからは「どんな人にも一つぐらい人より優れたところがあるから、それを使って命を与えられた恩返しをしよう」と子供たちには言おうと思う。そして私も、日常生活を、厭わずに丁寧に過ごしていきたい。